

雑感・私の郷土史

— 神話のふるさと山陰 —

荒井 優 (Masaru ARAI)

鳥取看護大学 看護学部看護学科

1

倉吉駅から東へ2kmほど行ったところに^{おおひらやま}大平山があり、その山の中腹に鳥取短期大学がある。私はいまから25年前にこの鳥取短期大学へ着任した。そして、その広々とした自然豊かな構内の北西部に、4年前に開学した鳥取看護大学の建物がある。私の研究室はその建物の5階にある。研究室からは、眼下に倉吉市の大半を見渡すことができる。晴れた日には、陽の光をあびた倉吉が輝いて見える。向かって右側には天神川に合流する小鴨川が流れている。正面に広がる倉吉の向こうには^{うつぎやま}打吹山が立っている。そのさらに奥には^{ひるぜん}蒜山三山を見ることができる。山と川に囲まれた、日本の原風景がここにはある。

私の山陰

25年前にこの地へ来て、気がついたことが3つある。1つ目は、食べ物が新鮮で、とくに魚や野菜は、私がそれまで住んでいた東京や京都とは比べようもないほど、美味しいことを知った。スーパーに並べられた魚はいずれも死にかけているのだが、それでもまだ死んでいない「活着ている」魚がそこにはあった。「活着た魚」と「死んだ魚」の区別がある。それがこの地の文化であることを知った。

2つ目は自然が豊かだということである。とくに初夏には樹々が勢いよく緑の葉を吹いていく。秋の紅葉はさらに美しく、しかも秋の樹々が匂い「香る」ことを知った。その活き活きした自然の力に、私は感動すらおぼえた。雨が降れば降ったで、それまでの私が見たこともない感動的な光景が広がった。雨の止んだあとに、湿気を含んだ山が煙のような雲を吐き出すのである。まるで山が「呼吸」している。山が「活着ている」。私はそう思った。昔の人は、山は生きもののように活着ていて、山には何かが住んでいる、そう見てとったであろう。和辻哲郎の『風土』を私は読んで知っていたが、この山陰にはまだ豊かな自然があり、多神教的な日本の風土が典型的に存在していることに気がついた。そして私が「日本人」であることを改めて痛感した。

そして3つ目は、ここ山陰の地は「神話のふるさと」なのだ。かつての伯耆、因幡からなる鳥取県は、出雲の国に隣接し、出雲の文化圏に属する地域であった。『古事記』『日本書紀』に語られている神話の舞台の44%は山陰、40%は九州および^{たかまのほら}高天原である。神話に登場する場所が、山陰には数多く存在している。さらに、私がいるこの大平山の近隣のいたるところに、名も知れぬ古墳が数多く眠っている。鳥取県の調査によれば、県内にある古墳埋蔵地は4000基近くに上るが、その大部分は未調査だとのことである。山陰は、多くの古代の歴史遺産に恵まれていながら、それらがいまだに地下に眠ったまま放置されている。たくさんの文化的宝の山が、いまだに陽の目を見ないまま埋もれている。とても残念なことだと思う。

2

定年退職を機に、「地域」をテーマとして何か原稿を書いてほしいとの要望を受けた。さて何を書いたものやら、と思索した。私の専門は宗教哲学である。学生たちには人間学や宗教学を講じている。いずれの学問も、「地域」ではなく「人間」を解明することが課題である。「地域」は私の専門外なのだ。しかし、専門外でも、「地域」にかかわる何かについて書けと言われれば、私が住んでいるこの山陰が古代日本史においていかに重要な地域であるか、ということ述べたいと思う。(ほんとうは、専門外の私がすることではないかもしれない。)

波波伎神社

鳥取短期大学・鳥取看護大学が位置する大平山の西側のふもとに、古いひなびた神社がある。「波波伎神社」という。うっそうとした巨木の杜が神社を取り囲んでいる。鳥取県のこの地域(中部・西部)をかつては「伯耆」と呼んでいたが、古くは「波波伎」と呼んでいた。本学の学歌にも、近隣の倉吉北高校の校歌にも、「波波伎」という地名がうたい込まれている。創建時期は不明であるが、平安時代に編まれた国の神社一覧ともいべき「延喜式神名帳」(延喜5年/西暦905年に編纂が始まった)にはこの神社が記載されているというから、かなり古い神社であることがわかる。神社の敷地内には横穴式の古墳があるから、神社の由来はもしかして古墳時代にまでさかのぼるのかもしれない。この波波伎神社には事代主の命が祀られている。みなさんは、「事代主」と聞いてもすぐにはピンと来ないかもしれない。大国主の御子で、出雲の「国譲り」物語に登場する二人の御子のうちの一人(長子)である。その後、室町時代になって「七福神」信仰が広まって、大国主が「大黒さま」と呼ばれるようになった頃、これと並んで「恵比寿さま」と呼ばれて親しまれたのがこの事代主である。

国譲り

『古事記』によれば、須佐之男の命とその娘婿の大国主の命(出雲では「大己貴」[大きい土地を持った貴い人]と呼ばれている)が、二代にわたって、「葦原の中国」である出雲の国を治め、国は栄えた。それを見ていた高天原の天照大神は、豊かに実る「葦原の中国」は自分の息子たちが治めるべきだと主張し、国を譲るように使者を葦原の中国に送った。はじめに、天照大神の二男、天穗日が派遣されたが、ついに3年たっても帰ることがなく、葦原の中国に居ついてしまった。次に天若日子が遣わされたが、これも大国主の美しい姫君の下照姫と結婚してしまい、復命することはなかった。たび重なる失敗の末に派遣されたのが、建御雷である。建御雷は出雲の国の稲佐の浜に着き、十掬の剣を抜いて逆さまに立て、その切先にあぐらをかいて座り、大国主に国譲りを迫った。大国主は、自分の二人の息子が承諾すれば、自分も国譲りを承諾しようと答えた。美保の関で釣りをしていた息子の一人、事代主が呼び出された。事代主は「わが父は謹んでこの国を献上すべきです」と言って国譲りを承諾して、逆手を打って船に青柴垣をめぐらし、その中に消えた。大国主のもう一人の息子、建御名方は戦いを挑み、建御雷に力比べを申し出た。結局、建御雷は建御名方を圧倒し、建御名方を信濃の国の諏訪まで追い詰めた。建御名方は信濃の国から出ないことを誓い、国譲りを承諾した。息子が二人とも国譲りを承諾したことで、やむなく大国主は国譲りを承諾した。しかし、国譲りの条件として、天の御子がお登りになるような壮大な宮殿を作ってほしいと、大国主は申し出た。こうして、出雲の国の多芸志の浜に壮大な宮が築かれた。これが出雲大社(杵築大社)の起源である。

以上が、『古事記』に語られた「国譲り」物語のあらすじである。

3

この「国譲り」の後に、どのような顛末をもって、二人の御子が終焉したのかについては、『古事記』『日本書紀』のいずれにも書かれていない。しかし、ゆかりの神社の伝承や神事を丹念に追跡することによって、物語の展開がおぼろげながら見えてくる。

事代主の終焉

美保の関ゆかりの美保神社では、「国譲り」の顛末が、毎年4月7日に「青柴垣神事」として再現されている。1年間、海水で身を清めた二人の氏子が、それぞれ大漁旗や櫓で装飾して「青柴垣」を表現した二隻の船に乗り、美保の関を出発し、港の中央まで出ていく。

美保神社は事代主の終焉の地であるという説（谷川健一）もあるが、国譲りの後も事代主はさらに逃れて別の地で亡くなったという説がある。先に、大学の近く、大平山の西の麓にある神社として紹介した、「波波伎神社」がそれである。

波波伎神社の由緒は、次のように記されている。「八重事代主の命は大国主の命の御子神で、国土経営のためこの地を巡事の時、当社の西方「ワタラガヒ」（渡上）の地に上陸され、当地方の開拓殖産に務められ、天孫降臨に当っては、父神にすすめて恭順潔く、国土を奉獻して誠忠を尽くされ、父神に対して孝道を全うせられ、献国後も永く皇室の護り神と成られました。その荒御魂は青柴の巻籬の内に鎮まりました。これが当社御鎮座の根源であります」（全国神社祭祀祭礼総合調査（1995））。

この由緒によれば、事代主は、父神である大国主の指示により、この地（波波伎＝伯耆）を出雲の国として開拓し殖産に務めた。しかし、国譲りの時には父神に献国をすすめ、国譲りの後にはこの地（福庭）に幽閉され、天孫（高天原＝天照大神一族＝天津神系）の御代の繁栄を祈りながらこの地で亡くなった、ということである（多羅尾整治『山陰の古事記謎解き旅ガイド』P.76）。

倭文神社と下照姫の終焉

「国譲り」に関係する近隣の神社は波波伎神社だけではない。鳥取県中部の東郷池をはさんで、西側に波波伎神社があるが、その対岸の東側、御冠山の中腹にある「倭文神社」も国譲りと深い由緒ある神社である。平安時代から、伯耆の国の一宮とされている第一級の古社である。ここで祀られている主祭神は下照姫である。「国譲り」物語に登場する、大国主の娘であり、天孫の若者、天若日子と恋に落ちて結婚し、ほどなく夫と死別した未亡人、下照姫である。

倭文神社の社伝によれば、「大国主命の娘、下照姫命が、出雲から海路御着船、従者と共に現社地に住居を定め、当地で死去されるまで、安産の指導に努力され、農業開発、医薬の普及に尽くされた」という。「国譲り」の後、息子の事代主は出雲の浜から船で東へ逃れ、大平山の西麓の福庭（倉吉市）へ渡ったが、それと時を同じくして、娘の下照姫もやはり出雲から東へ海路で宇野（湯梨浜町）に渡り、身のまわりのお世話をする従者とともに御冠山にのぼり、東郷池の東に面する山の中腹に住居を定められた。その跡地が「倭文神社」である。大国主を首長とする出雲の国が天孫族に滅ぼされた後も、下照姫はこの地（東郷池周辺）にとどまった。地元民の安産を指導し、農業や医療の普及に尽力し、やがてこの地で亡くなった。おそらく、民を思う心の優しい、高貴な女性だったのであろう。その容姿は光輝くばかりに艶麗であったゆえに、「下照姫」と称えられたという伝承がある（博多「下照姫神社」）。

この倭文神社の西側、東郷池に向かって山を下りていくと「出雲山展望台」がある。下照姫はしばしば故郷をしのんで、この高台に来て、遠く出雲を望まれたそうである。その姿を見て、土地の人々はいつしかこの高台を「出雲山」と呼ぶようになったということである。（ついでに言えば、倭文神社の社地に住む氏子は、下照姫の従者として共にこの地へ移ってきた出雲族の子孫だということである。）

建御名方の終焉と諏訪

大国主の御子たちが、伯耆の国のこの東郷池の周辺で終焉を迎えたことがわかったが、もう一人の御子、遠く諏訪にまで落ちのびて行った第二子の建御名方は、その後、どのような顛末を迎えたのか、ひじょうに気になるところである。

戦いに敗れた建御名方は、出雲から日本海の海沿いに東へ北上して逃れて行った。そして、越（現在の新潟県）を経て信濃の国（現在の長野県）まで北上し、船で千曲川を上り、横山（善光寺の東隣）にたどり着いた所で、建御雷に追撃されて応戦した。その時に建御名方軍が築いた城跡があり、それゆえにその地は「城山」と名づけられた。その高台の城跡（横山城跡）に「健御名方富命彦神別神社」が建っており、建御名方とその長子の彦神別が祀られている。さらに、横山城跡から東へ2kmほど離れたところに、「妻科神社」がある。この神社の由緒によって、建御名方に妃がいて、妻子一族を伴ってこの奥地にまで逃れてきたことがわかる。

妻科神社の本殿には建御名方の妃神である八坂刀売姫が祀られており、相殿には夫神の建御名方と長子の彦神別が祀られている。社伝によれば、建御雷軍との激戦のさなか、八坂刀売姫は戦禍を逃れて、少し離れたこの地に隠れ潜んで難を逃れたという。結局、戦いに敗れた建御名方軍は上田から松本へ、さらに岡谷へと敗走し、ついに諏訪で捕らえられ、降参した。

諏訪の建御名方

「一生涯信濃の国の外へは出ない」と誓った建御名方一族は、権力の奪回を断念し、この日本の僻地（当時は日本の最東端であった）に根をはることを選んだ。先住の地元民（縄文人）を教化し、信濃を開拓し、米づくりを指導した。（「諏訪大明神画詞」）建御名方は13人の息子たちを信濃の各所に配置し、信濃の国土経営に尽力した。信濃の多くの神社が、建御名方とその家族を祀っている由縁である。その筆頭が、「御柱祭り」で有名な「諏訪大社」である。建御名方神と八坂刀売神の夫婦二神を祀り、加えて兄神の事代主神が配祀されている。

諏訪大社の由緒は以下のとおりである。「祭神、建国津御名方神（たけ一くにつみなかたのかみ）は、大国主命の第二子神として、御兄事代主命と共に大国主命を輔けられ、国土経営の大任に当てられ、天孫降臨に際し天神の勅を奉じ、国土を奉り科野（信濃）国洲羽（諏訪）の地に退かれ、妃神八坂刀売神並に御子神と共にこの地の国土開発に当られ、農耕機織を奨められ……。」

4

日本の歴史的ルーツ

「日本」という国が生まれようとする黎明期に起こった出来事は、『古事記』『日本書紀』に記載され神話的に暗示されている。さらに、それだけでなく日本の全国に遺跡のごとくに生き延びる神社の伝承のなかにも、きちんと書き残されているのである。

私たち、戦後に生まれた団塊の世代は、『古事記』『日本書紀』が神話であり、作り話であって史実ではないと教えこまれてきた。その旗頭が、早稲田大学・東洋史学教授、津田左右吉（つだそうきち 1873-1961）である。津田左右吉は、たとえば「皇祖神、天照大神は、もともとは男性であった」と主張し、この公理に反する『古事記』『日本書紀』は学問的に信頼しうる文献ではないと断じ、そのすべてを研究対象から除外した（主観的批判主義）。戦前・戦中は、明治時代に確立された（キリスト教に比肩する）「国家神道」という一神教的イデオロギーが先鋭化されたが、その反動であろうか、戦後は一変して、『古事記』『日本書紀』は非歴史的な読み物という価値評価がなされた。その帰結が、今の私たちの「日本人」の現状である。哲学、宗教学を専門研究してきた私が、この歳になって、つくづく思うことがある。

日本人の歴史、とりわけ日本人自身の歴史的ルーツについての無知（闇）である。私自身がそうなのだ。いったい、日本人はどこから来たのか、どのように国づくりをしてきたのか、どのような悲劇、

どのような顛末があって、今の日本があるのか、それらのすべてを知らない日本人が、今の私たちののだ。（大学の授業で学生たちに、日本人のルーツについてのビデオを見せる時がある。それを見た学生たちはかならず感動する。）

歳をとって、老い先が短くなるにつれて、私はその歴史を知りたいと思うようになった。本当に不思議なことに、私たち日本人は、最初に日本の国を作った英雄が誰なのかさえ知らないのだ。

神話に隠された史実

日本の古代史をその大まかな骨格だけでも探ろうとする時、私たちの手元に残っている資料は、『古事記』『日本書紀』『風土記』、および古代の近隣国のもろもろの国史書（「魏志倭人伝」など）、さらに全国の神社に残る社伝・伝承である。最近では、9世紀平安時代に編纂された歴史書『先代旧事本紀』が歴史的資料として注目されている。序文に「聖徳太子と蘇我馬子が著した」との記述があるゆえに偽書であるという理由で、研究対象から外されてきた古書である。

これらの文献を批判的・合理的に検証しながら、古代日本史のおぼろげなストーリーを再構成していくのが、これからの古代日本史および「記紀」神話研究の課題なのだろうと思う。

つまり、『古事記』『日本書紀』は単なる作り話ではない。そこには、何らかの史実の残滓がある。さらに言えば、須佐之男も天照大神も大国主も、そのような名前だったかどうかはともかくとして、そのモデルとなった人物は実在したという立場から、資料探査を行うのである。（残念ながら、私はこれについてははずぶの素人で、門外漢であることを告白しておく。）

5

安本美典

さて、（私見であるが）そのような研究で最近とても興味深い研究成果を示されているのが、心理学者にして古代日本史研究家、安本美典（やすもとびてん 1934-）である。数理統計学の分析理論を使って、文献の背後にある、いわば無意識的な文章表現の解読を行い、その結果から（一点集中的な正解が不可能であっても）「かぎりなく正解に近い」状況証拠（あるいは傍証）の積み重ねを行うという手法である。たしかに、『古事記』『日本書紀』が作られた当時（8世紀）、これを作った人たちは（仮にそこに大きなねつ造があったとしても）歴史的真相を知っていたはずである。

さて、この安本手法を使って、いったい何がわかるのか。その一端を、ここで垣間見ることにしよう。

「葦原の中国」と「高天の原」

私たちは「国譲り」の大まかなストーリーを知っている。しかし、そこには書かれていないことが多数ある。（1）「葦原の中国」（＝「出雲の国」）と「高天の原」の関係はいかに？である。（ちなみに、「葦原」とはイネ科の葦が生えた沼地、つまり田圃に適した土地をいう。「中国」とは都から遠くなく近くもない「中間の国」という意味である。今日に言う「中国」地方の語源である。）（2）「高天の原」はどこにあったか？である。「高天の原」がどこにあったかとは、天照大神がどこにいたかということ、すなわち大和朝廷の祖先がどこから来たのかということである。それはまた、天皇家のふるさとがどこにあったのかということでもある。「高天の原」＝大和説、九州説、朝鮮説（江上波夫）、天上説（本居宣長）などがあるが、最近では九州説が有力になっている。

（1）の「葦原の中国」と「高天の原」の関係について、安本美典は『邪馬台国と高天の原伝承』のなかで、きわめて素直に『古事記』の文章比較をしている。若干の事例を紹介しよう。①「天照大神は、天の岩屋戸を開いて、さし籠もられた。ここに、高天の原はみな暗く、葦原の中国も、ことごとく闇となった。」②「天照大神が、天の岩屋から出られたとき、高天の原も葦原の中国も、照り明るくなった。」『古事記』に書かれたこれらの文章を素直に（先入観なしに）読めば、出雲と高天の原はそれぞれ独立した2つの政治勢力ではなく、同じ勢力下にある2つの地域（部族勢力）だと考えることができる。

そして、(2)「高天原」の場所については、1つの手法として、安本美典は「地名の統計」をカウントする。『古事記』に出てくる国名（「高天原」「葦原中国」「黄泉国」…）と奈良時代の行政区分（「山陰道」「西海道」「畿内」…）に照らした地名の頻度をカウントすると、興味深い数値が現れてくる。「高天原」35.3%、「葦原中国」25.5%、「黄泉の国」23.5%…。そして「西海道」29.5%、「山陰道」27.9%、「畿内」9.6%…。「葦原中国」が「山陰道」（出雲）であることがここで納得できるが、さらに「高天原」は「畿内」ではなく、むしろ「西海道」（九州）にあることが傍証される。

このことから、何が言えるのだろうか。出雲に1つの地域勢力があり、それを須佐之男・大国主が率いていた。そして、九州にも1つの地域勢力があり、天照大神がそのリーダーであった。（「天照大神」は『古事記』での呼称であり、『日本書紀』では「おおひるめのみこと大日靈女貴」、神社伝承では「おおひみこむち大日靈女貴」と呼ばれる。なお、『魏志倭人伝』の「卑弥呼」はこの「日靈女」に比定される。）出雲と九州は別々の国ではなく、おそらくある種の同盟関係にあったのではないだろうか。そうだとすれば、先述した「国譲り」物語は同盟国の覇権争い、あるいは同一国の相続争いといった質のものになる。

6

原田常治

今からもう40年以上も前になるが、須佐之男と大日靈女の関係について、ひじょうに大胆な仮説を立てた人物がいる。天照大神（大日靈女）は須佐之男の「現地妻」だったというのである。アッと驚くと同時に、私は90%ほど納得してしまった。その人物とは、『古代日本正史』を著した原田常治（はらだつねじ 1903—1977）である。出版社の編集長を務め、70歳にして退職した後、原田常治は全国の神社を訪ね歩いた。『古事記』『日本書紀』は当時の権力者・藤原不比等が歴史の真相を隠蔽するために編纂したものであるから、その史実性は信用できない。全国に残っている「記紀」編纂以前の古社をまわり、その祭神名、社伝、伝承を集めてつなぎ合わせることによって、日本の黎明期の歴史が浮き上がってくると、情熱的な研究探査を行った。そうして著した労作が『古代日本正史』である。40年たった今でも、これに啓蒙される人が（私もだが）多い。ネット情報では「トンデモ本」に上げられているが、そこに着想された骨組みは一考する価値があると思う。そして何よりも、（インターネットのない時代に）そこに書き込まれた情報量の多さは驚異的でさえある。

「天照大神」のすり替え

さて、原田常治によれば、『古事記』『日本書紀』において藤原不比等と持統天皇が行った最悪の改竄は皇祖神「天照大神」をすり替えたことであった。それ以前の天照大神は男神だった。当時の天皇（女性）体制を正当化するための改竄だった。原田はもともとの天照が誰だったのかを突きとめるために、神社伝承の探査を行った。記紀以前の天皇が参拝していた「いそのかみ石上神社」「おおみわ大神神社」「おおやまと大和神社」をはじめとして、関係する神社を歩きまわった末、もともと崇敬されていた天照大神は「あまてる天照くにてるひこあめのほあかりくしたまにぎはやひのみこと国照彦天火明櫛玉饒速日命」であることを突きとめた。「饒速日の命」は、『古事記』『日本書紀』によれば、初代神武天皇が大和入りした時にすでに大和に先住していた天孫系の王であり、物部氏の祖神とされている。「記紀」は大和に最初に君臨していた皇祖神・天照国照大神を抹消した。そして、私たち日本人は自分たちの歴史的ルーツを失ったのである。

さらに、原田はこの饒速日なる王が実は誰なのかを追跡し、ついにこの日本最初の大和の国王が須佐之男の息子であることを突きとめた。

須佐之男の国作り

原田常治によれば、日本の国作りの最初は須佐之男にはじまる。須佐之男は西暦 122 年頃、出雲の沼田郷に生まれた。現在の平田市である。父はモンゴル系（蒙古・満州）だったという。須佐之男が 20 歳頃、奥出雲一帯を支配していた出雲一の豪族遠呂智族との衝突事件が現在の木次で起こった。周知のように、古代の奥出雲は砂鉄の産地であった。遠呂智族は奥出雲一帯の鉄の鉱山を所有していた。

その奥出雲の一角、横田に住む、美しい稲田姫が遠呂智族に奪われようとした時、須佐之男が遠呂智の館へ切り込んだ。その合戦にちなんだ各場所に、神社（稲田神社・斐伊神社・布須神社・八口神社・八重垣神社・佐世神社・須我神社・伊賀多氣神社など）が建てられており、合戦の顛末や由緒が書き残されている。

その一つ、伊賀多氣神社には、次のような略記がある。奥出雲一帯を支配する遠呂智族の鉄穴流し（砂鉄を採るために山を崩して流す）のために四方の山がはげ山となり、洪水が頻発していた。そこで、須佐之男が遠呂智族を退治し、新羅から持ち帰った樹木の種子を荒れ山に植樹して治山治水を行った。木材を舟や家や薪の材料にすることを民に教え、その後、須佐之男は息子の五十猛とともに国中を回って植樹造林をすすめた、という。

出雲を制覇した須佐之男は、稲田姫とともに現在の大東町須賀に居を構えた。その跡地に「須我神社」が建っている。須佐之男が「八雲立つ 出雲八重垣 妻ごみに 八重垣つくる その八重垣を」と謳ったのはこの地である。北東 1 km ほど離れたところに八雲山（三室山）がある。ここを拠点として、須佐之男は出雲の国作りを始めた。家庭にあつては、稲田姫とのあいだに 8 人の御子が生まれている。八島野命、五十猛命、大屋津姫、抓津姫、大歳命、宇迦御魂命、磐坂彦命、須世理姫の 5 男 3 女である。夫婦と御子八人を祀った神社が、京都をはじめとして全国に広がる「八坂神社」あるいは「弥栄神社」である。八人の子がみな優れた者で大変に栄えたという意味である。「八」は須佐之男を表す象徴的な数字だったのである。

原田常治は、この息子たちのうち第 5 子の大歳が「饒速日」であると推論している。いや、饒速日は第 2 子の五十猛であるとする説もあるが（戸矢学『ニギハヤヒ〜『先代旧事本紀』から探る物部氏の祖神』）、ここではこれ以上に深入りしないことにする。本来の皇祖神・天照国照大神を含めて、日本の国作りを最初にはじめたのは須佐之男一族だったということなのだ。

出雲を制した須佐之男は、40 歳頃には海路で北陸や山口にまで遠征したようである。そして 50 歳を過ぎた頃に、須佐之男は、第 5 子の大歳を連れて、温暖で米作りに適した九州遠征に乗りだした。筑紫を通って、豊の国、日向の国へと南下した。（原田常治は、邪馬台国が日向（現在の宮崎県西都原）にあったと考えている。邪馬台国の場所はいまだに未確定であるが、しかし近年、「魏志倭人伝」の記述を忠実に読み解き、簡単な「数理科学」と“Google map”を用いて試算した研究（中田力『日本古代史を科学する』）によれば、邪馬台国はやはり現在の西都原に行き着くことが検証されている。）

須佐之男と大日靈女

その日向の国（＝高天原）の首長が伊弉諾命であり、その娘が大日靈女（天照大神）であった。須佐之男 55 歳ないし 56 歳、大日靈女 23 歳ないし 24 歳であった。大日靈女は、九州に来たときの須佐之男の現地妻のような形で、3 人の女子を産んだ。多紀理姫・市寸島姫・多岐都姫の三姉妹、いわゆる「宗像三女神」である。『古事記』『日本書紀』では、天照大神と須佐之男が相争い、「うけい」（誓約）によって 5 男 3 女が生まれたと、意味不明な説明がなされている。出雲族と日向族が衝突したために、戦いの解決手段として、須佐之男と大日靈女が性的に和合して両部族の血をひく混血児を産んだということのようだ。それを「うけい」というのだろう。今でいう「政略結婚」である。この時に生まれた 3 女が先の三姉妹である。

高天原と出雲は、「記紀」では敵対関係にあるような印象を与えているが、実はいわゆる「内縁関係」、つまり同盟関係にあったようである。その傍証となるものが、出雲の「八重垣神社」に残されて

いる。平安時代（894年）、宇多天皇が出雲国庁造営の際に描かせた壁画がある。巨勢こせの金岡かなおかによる作と伝えられている。そこには、若くて自信にみちた須佐之男と稲田姫、（姫の父母）足名あしな権づち・手名て権なづちが描かれているのだが、さらに加えて、幸せそうな日向族の大日靈女と市寸島いちすんじま姫までもが描かれている。おそらく、平安時代の当時には一つの絵のなかに描かれるような関係として古いにしえより伝え聞いていたのであろう。

須佐之男の後に、その姫君・須勢理姫の婿である大国主（三刀屋出身）が、出雲から九州の広大な国を引き継いで第2代の国王となった。大国主もまた、九州に大日靈女の娘・多紀理姫を現地妻とした。原田常治によれば、大国主は出雲と九州を数年おきに行き来していたが、最期は九州の多紀理姫のもとで終焉した。彼の後継ぎが、出雲と九州の双方にいたから、世継ぎの争いが起こった。その争いがいわゆる「国譲り」物語となった、というのが原田常治の謎解きである。もちろん、これはまだ立証されていない。一つの仮説である。それも40年以上も前のものである。そろそろ決定的な解釈が出て良さそうなものだが。